

佐佐木頼綱

（平成二十九年五月号）

一生の長さを思ふ3／4読み終へし『チエ・ゲバラ伝』

窓際を月のひかりは去りてをり幾たびか目を覚ましたるのち

暗闇に失ひてゐし輪郭を夜の木の香に触れ思ひ出す

太陽に温められた風がわが頬に届けり朝が来りぬ

地平線 視線でなぞる心地良さこの弧の星に我は立ちをり

暁は命の形かもしれないぬ鳥や鼠と朝日見てゐる

青空へ告げる言葉よ（プアーツ、ボツボア）と群れ飛びてゐる

フラミンゴの声



●作者の言葉

二年前、世界一周飛行機

チケットを購入し、一ヶ月で

十五カ国ほどを巡る旅をした。

一国二日程のスケジュール

だった為、それぞれの国を深

く知る事は出来なかつたが、

この星で人がどう暮らし、命

に折り合いをつけ、創作して

いるかを俯瞰的に眺めること

が出来た。それまで僕はアニメズムで世界を理解し納得していたのだが、ジャングルでは嘴の生えた神様の方が、砂漠では形ない神様の方が、石畳の町では過裝飾の彫刻の方が、世界の解釈として説得力を持っていた。世界の様々な解釈を詠みたい。

●選者の言葉

模糊とした人生に長さという基準を与え、3／4と限定すると線形の構図的な骨格が見えてくる。地平線を視線という鉛筆でなぞってゆくと弧の線となり、それはそのまま地球の円につながってゆくのだ。暁がもたらす朝日を命の形ととらえ、じっと見ている生きものたちの視線を、はろばると注がれる光線と合体させる。太い線だ。まぶしい円だ。作者の作品の構造的なものに触れた気分がする。

たまたまこの一年の担当欄で四回の特選になった。めぐり合わせもあるが稀なことである。大きな旅で大きな視点を得られたようだ。生きものへのやさしさは天性のものであろう。四篇二十八首それぞれゆつたりにした調べのみずみずしい作品群であった。